素顔の休息

ことぶきめぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素顔の休息

【Ｎコード】

Ｎ５３０５Ｅ

【作者名】

ことぶきめぐみ

【あらすじ】

毎日をただ平凡に生きて来た優等生の絢子（あやこ）。ある日、溜まったストレスを発散させるようと渋谷で買い物中にナンパされる。普段なら無視するのに「真面目なんだね」の一言で反射的にＯＫしてしまう。彼に連れられてカフェバーで一杯……までは好かったのだが、ついつい勧められたお酒を飲みすぎてしまって――翌朝、人生初の朝帰りをするハメになった彼女を待っていたモノは……！？基本、ラブコメです。よろしくお願いします。

【プロローグ】（前書き）

第１話～第４話まで、一気にＵＰです。
楽しんでいただければ、嬉しいです。

【プロローグ】

楽しい事なんて、何も無いと思ってた。
明日が待ち遠しいなんて、思ったことも無かった。
ただ、毎日同じような出来事と同じような台詞の繰り返しで、それらに機械的に応えて行くだけの自分には、心など最早存在していないんじゃないかとさえ思っていた。
時折、何かの切っ掛けで心の奥の方で『ナニカ』の蠢く音がしても、気のせいだと自分に言い聞かせた。
そうすれば、また、いつもと変わらぬ機械的な日々に溶け込む事が出来たから。そうすれば、もう、何も考える必要なんてなかったから。

諦める事は簡単だけれど、最初から期待なんてしない方がもっと楽だって気付いたのは、いつだっただろう。
期待なんてしなければ、傷つく事もない。
期待なんてしなければ、諦める必要もない。
期待なんてしなければ――期待なんてしなければ、私は『いつもの私』で居られる――。

【1．最悪な日常　（Ⅰ）　】（前書き）

第1話～第４話まで、一気にＵＰしました。
よろしくお願いします。

【1．最悪な日常　（Ｉ）　】

「くだらない……。」
絢子(あやこ)は口の両端を少し持ち上げて、優等生の仮面を被ったまま喉の奥で小さく呟くと、本日３度目の溜息を飲み込んだ。
教室内の自分の席に座ったまま、壁時計に目をやると、１３時３０分。
後１０分程で、昼休みが終わりを告げる。

机を挟んで前の席には、クラスメイトの美鈴(みすず)が座っている。
彼女は、同じように周りに集まって来て椅子や机に直接腰掛けているクラスメイト達に、最近出来た彼氏が浮気しただのしないだのと、大袈裟な程の身振り手振りを加えながら喋っていた。
周りのクラスメイト達は、まるで自分の事のように
「解る＆ａｍｐ；＃１２３１６；」
などと、無責任に頷いたりしながら、憶測の域すら出ていない彼氏の浮気話に聞き入っている。
話している当の本人は、周りからの賛同を得られた為か、
『かも知れない』
と云う可能性を表した表現から、次第に
『そうだと思う』
と勝手に疑惑を深め、最後には
『そうに決まっている』
と云う、確定的な言葉を興奮気味に口にしていた。
「浮気するなんて酷い」
「男ってサイテー」
なんて口々に鳴るクラスメイト達は、少し興奮気味だ。
彼女達の勢いに文字通り煽られる形で、美鈴の彼氏は実際はしては

居ないかも知れない浮気を確定事項とされつつあった。

「絶対、許せない！」

息巻いた美鈴は、胸の辺りで両手の拳をぎゅっと握りしめて、勢い良く立ち上がった。

美鈴は普段は大人しいが、思い込みが激しい。特に、今日の様に感情が高ぶっている時などは、更に固定観念に取り付かれやすい傾向がある。

絢子は、無実の罪を着せられた美鈴の彼氏に対して、僅かに同情を感じた。

女子高生と云う人種は、一人一人はごく一般的な少女だが、集団になると一気に凶悪性を増す。

特に、絢子の通っている女子校と云う一種特殊な環境下にあっては、彼女らの無邪気な凶悪性は、増殖の一途を辿っていると言っても過言ではないだろう。

「美鈴ちゃん。」

次の授業の教科書を机の上に整えながら、絢子はゆっくりと、しかしはっきりと口を開いた。

「取り敢えず、本人に確認するのが先じゃない？」

「まだ浮気したと決まった訳じゃないんだし……。」と美鈴の方を見ずに続ける。

温度が感じられない程の冷静な言葉に、自分の妄想に酔っていた美鈴は、立ち上がった体制のまま困惑する。

「でも……」

「『でも』、好きなんでしょ？」

美鈴は一瞬固まって、やがて小さく頷いた。

「じゃあ、きちんと確認した方が好いよ。思い込みで突っ走って後悔するのは嫌でしょう？」

「ん……、そう……だね。」
美鈴は一瞬泣きそうな表情になって、
「ありがとう絢(あや)ちゃん……。」
と泣き笑いのような顔で呟いた。

二人の会話を見守っていたクラスメイト達の間から、
「流石、絢ちゃんは冷静だよね。」
――と賞賛や憧れにも似た視線が集まる。

クラスメイト達の視線に気付かない振りで黒板の上にある壁時計を見やった時、午後の授業開始を知らせる予鈴が教室内に響いた。

昨今の奔放すぎる程に自由な学生達が形成する、学校と云う小社会。それは時に、群れる事を得意としない者達の存在自体を否定し、排除しようとする。
『出る杭は打たれる』は日本ならではの悪習に満ちた諺だが、この小社会の中においても例外ではない。
悪目立ちせずに彼女達の中に溶け込み上手くやって行くには、程よく彼女らの話を聞き、程よく聞かない事だ、と絢子は思う。
くだらないと思いながらも、興味もないクラスメイト達の会話に参加して、時折口を挟むのは、彼女らに無関心である事を悟られて、面倒な事になるのを避ける為だった。
優等生の親切な顔で、心にもない優しい言葉をかけるのも――。

幸いにも絢子自身が成績優秀で、生徒会などの活動に関わっている事などから、周囲の生徒達に『冷静で優しく頼りになる優等生』として少なからず慕われていた。
都内随一のお嬢様学校にあって、絢子の家がその中でも一際裕福な部類であると云う事も少なからず関係していたのだが、自分の家を嫌悪している絢子にとっては、皮肉な効果としてしか認識されてい

ない。
同じ年頃の少女達と比べると幾分冷めた温度の絢子には、クラスメイト達の話の内容を理解や共感できた事など、只の一度もないのだけれど――。

「くだらない……。」
絢子は、机の上に置いた教科書を見つめたまま、口の中で一人ごちて、今日４度目の溜息を噛み殺した。

【2．最悪な出逢い】（前書き）

第１話～第４話まで、一気にＵＰしました。
楽しんでいただければ、嬉しいです。

【2．最悪な出逢い】

学校や家で嫌な事があった時は、渋谷の街で憂さ晴らしの買い物をするのが絢子のストレス解消法だった。実のところ、大して解消できた例(ためし)はないのだだけれど、何となく同じ場所へ足が向いてしまうのと云うのが常だった。

駅構内の目立たない位置にあるコインロッカーに常備してある私服を取り出すと、直ぐ脇にあるトイレで着替え、髪型を変えて薄く化粧をする。絢子からアヤコへと変わる瞬間だ。
バッグに入れた制服をまた同じ位置のコインロッカーに仕舞って、渋谷の街へとゆっくりと踏み出していく。
それが、アヤコのいつもの儀式だった。

渋谷は若者の街――そんな事を言ったのは、誰だったろうか。
学校帰りだろう制服のままで、ブラブラと目的もなくうろついている学生の姿が多く見られる。

人が溢れ返っている駅前は、行き交う人達の多さに、目的地へ真っ直ぐと進む事さえ困難だ。
アヤコはこの街が好きだった。
何処からか沸き出しているかの様な人混みの中で、すれ違う他人を気にする者など誰も居ない。
そんな雑踏の中が心地よかった。
ひしめき合った大勢の他人と云う海の中を、まるで魚の様に泳ぐアヤコは、限りなく自由だった。

「ねえねえ、彼女～。」
交差点を歩いていると、不意に声を掛けられた。若い男の声だ。

アヤコは直感でナンパだ、と感じた。
けれど、いちいち断るのも面倒くさいので、そのまま気付かない振りをして素通りしてこうとした――その時、いきなり背後から腕を掴まれた。

「っ何すんのよっ！？」
とっさに振り返って、相手を睨み付けてやる。
「何って――ナンパ？……いや、ホントは違うんだけど……。やっぱナンパか……？」
何やら訳の解らない事をブツブツと云いながら、男は何事か思案しているようだ。
けれど、その間もアヤコの腕を放そうとはしない。寧ろ、逃がすまいとしっかり握っている、と云う感じだ。

「……ナンパならお断りなんだけど。」
冷たく吐き捨てると、男は珍しいものでも見るように少し顎を引いてアヤコの顔を観察するようにじっと見つめたかと思うと――ゆっくりとした動作で口を開いた。
「だから――、ナンパじゃなんだってば。正確には。」
「はぁ？」
男の意味不明な発言に、つい間抜けな一言を返してしまう。

「じゃあ、何だって言うのよ。って言うか、手、放してくれない！？」
「ヤダ。」
「なっ。何なのあんた！？」
「だーから、これからソレを説明しようとしてるんじゃんかぁ～」
男は間延びした口調で言うと、空いている方の手でポリポリと頭をかいた。

「――語尾を伸ばすな！！」
アヤコは、男ののろのろとした喋り口調に耐え兼ねて、つい叫んでしまった。
「へっ？あ、はい！」
歯切れ良く答えると、男は何故か満面の笑みを浮かべて、アヤコの目を見据えた。
「キミ、真面目なんだんだねぇ……」
感心したように言う男の口元が、心なしかニヤついて居るように見えたのは、アヤコの被害妄想ではなかったと思う。

【3．最悪な一夜】（前書き）

第１話～第４話まで、一気にＵＰしました。
楽しんでいただけると、嬉しいです。

【3．最悪な一夜】

「最っ悪……！」
アヤコは心の中で思いっきり叫んでいた。
先ほどの男にムリヤリに押し切られる形で、あのまま連れ出されてしまったのだ。
二人は今、男の行き付けらしきカフェバーに居て、男は涼しい顔でアヤコの隣に腰を下ろしている。

最悪だ――。

確かに、真面目だと言われた事に逆切れして、初対面なのにも拘わらず――しかも大っ嫌いなナンパなのに――正に売り言葉に買い言葉でＯＫしたのは、他の誰でもないアヤコだけれど。
それでも――男の所為（せい）にしない訳には行かない程、まんまと彼の策略に嵌ってしまったことに腹が立っていた。

ホント、最悪……。

「ねえねえ。そう言えば、まだ名前も聞いてなかったよね？」
男がウェイターによって運ばれてきたギムレットのグラスに一口付けると、口を開いた。
「おれ、上条壱哉（かみじょういちや）。こう見えても、２５歳、独身。因みに、彼女募集中で～す！」

壱哉と名乗った男は、今更ながら改まって自己紹介を始めた。まるで合コンのような軽いノリだ。
こう見えても、と前置くあたり自分の外見をある程度は解っている

ようだ。
実のところ、彼はまだまだ１０代で通りそうな容姿をしている。つまりは、超童顔。
恐らく、常連でない場所でならば、お酒を飲ませては貰えないだろう。

「……オッサン。」
意外と大人でビックリしたのを誤魔化すように悪態吐いて、目の前のマルガリータを一気に煽った。
「誰もあんたの事なんて訊いてないし。てか、彼女募集中とかどーでも好いし。」
「え～、ヒドイなぁ～。彼女、可愛い顔して結構言うねぇ～。てか、お酒強いんだね～。」
結構キツイ事を言われているにも拘らず、何故か妙に嬉しそうな壱哉は、ウェイターに新しいカクテルをオーダーする。

「ねーねー、じゃあさ～。君は？」
「……はぁ？」
「君の名前だよ～。」
少しお酒の回った頭でどうにか誤魔化す方法を考えはしたものの、上手く行く筈もなく……。
「……アヤコ。」
結局、渋々と云った様子で小さく呟いた。
「アヤコちゃんかぁ～。可愛い名前だね～。」

不思議なトーンの声だな……とアヤコは思った。言っている内容は兎も角として、壱哉の声は、何故か心に直接響いて来る気がして、心地好いと感じた。
相も変わらず上機嫌な壱哉との会話と店の雰囲気に、アヤコは妙な居心地のよさを覚えながら、未だかつてない量のカクテルを胃の中

へと納めて行った。

【3．最悪な一夜】（後書き）

頑張って続きを書きますので、ご意見・ご感想などいただけると嬉しいです。
よろしくお願いします。

【4．最悪な朝】（前書き）

第５話～第８話まで一気にＵＰしました。
楽しんでいただければ、嬉しいです。

【4．最悪な朝】

ピピピピピ・ピピピピピピ・ピピピピピピ・ピピピピピピ……

「……うるっさい……」

アヤコは、ガンガンと響く様に痛む頭に眉間へと皺を寄せながら、携帯のアラームを消そうと手を伸ばす。最もありがちな、二日酔いのパターンだ。

何時にアラームセットしてたっけ……？まだ夢から覚めていない……と云うよりは痛みで回っていない頭で考える。けれども、そんな状態の脳ミソが的確な答えをくれる筈もなく……。

何とか手繰り寄せた携帯の時刻表示に目をやる。

6時ジャスト。

頭は、まだ中で何かの金属音が鳴り響いているかのように痛い。

「……何だ、まだ6時か……。」

アヤコは、ホッとして呟く。

「あったま、痛ぁ……。」

何でこんなに頭が痛いんだろう……？不思議に思いながら昨日の記憶を辿ってみるけれども、靄（もや）が掛ったかのように上手く思いだせない。

「――えっと、……何だっけ……？」

小さく身じろきをして、軽く寝返りを打った彼女の視界に入って来たものは――見覚えのない天井と部屋。しかも、どうやら自分は何一つ身に付けていない――らしい。極めつけは、自分が寝ている場所のすぐ隣にある、不自然なブランケットの膨らみ。

一瞬にして、絢子の脳が覚醒する。

「ま、まさか――ね。」

若干震える声で自分自身に言い聞かせながらも、恐る恐る、ブラン

ケットの端を摘まんで、ゆっくりと剥いで行く。絢子の心の中は、祈る思いで一杯だった。心なしかブランケットを摘まむ指先が小刻みに震えていた気がしたのは、彼女の気のせいではない。
祈りも空しく――ブランケットから出て来たのは、若い男。絢子の記憶の中には全くない、『男』が気持ち良さそうに寝ている。
「どう云う事……？私――、ウソでしょ……？」
一瞬、昨夜の自分の行動に想像を巡らせると、軽く眩暈が起きた。が、今はそんな事を考えている場合ではない――。やっと目覚めた絢子は、いつも程ではないにしろ、幾分か冷静だった。
まだ痛む頭を抱えて必死で身支度を整えると、財布から数枚お札を抜き出してナイトチェストの上に置く。この程度考えが回るくらいには、既に冷静だったのだ、と彼女自身は思う。
そうして、スヤスヤと寝息すら立てて眠っている男の姿を出来るだけ視界に入れないようにしながら、急いで部屋を後にしたのだった。
文字通り、一目散に。昨夜の出来事全てから、目を背けるようにして……。

「やっぱい、遅刻する！」
取り敢えず渋谷の駅まで戻って来た絢子は、コインロッカーから制服を引っ張り出すと、いつものトイレへ駆け込んだ。本当はシャワーを浴びたい所だったが、時間的に無理。兎に角、何も考えずに着替えて学校へ向かう事にした。
今日は、2時間目に体育があった筈。その後にシャワールームを借りれば好いだけの事だ、と冷静に判断した結果の行動だった。
しかし、人生初のこの状況下（二日酔い&朝帰りのダブルパンチ）で、例え絢子と言えども決して冷静で居られる筈などなかったのだ

った――。

【5．最悪な日常（ＩＩ）　】（前書き）

第５話～第８話まで一気にＵＰしました。
楽しんでいただければ、嬉しいです。

【5．最悪な日常（Ⅱ）】

「おはよ～、絢ちゃん。」
「おはよう。」
なんとか遅刻せずに間に合った絢子は、クラスメイトや顔見知りの生徒たちと挨拶を交わしながら、またくだらない日常の待つ学校へと足を向けていた。まるで同じ制服を着た群れの流れに逆らえないかのように、学校と云う檻の中へと吸い込まれて行く生徒達。その中に、絢子は確かに存在していた。その流れに逆らわず、抗わず、ただ、流されるまま――。
「おはよ、絢ちゃん。グラマーの予習して来た？」
背後から声をかけて来たのは、昨日彼氏の事で悩んでいた美鈴だった。昨日あんなに悩んでいたのが嘘のように、スッキリとした顔をしている。心なしか嬉しそうなのは、気のせいだろうか。
「おはよう、美鈴ちゃん。勿論、して来ているわよ。美鈴ちゃんは？」
絢子は取り繕った優等生の顔で答える。
「それがね……。昨日あれから彼氏のところに確かめに行ったんだけど、どうやら私の勘違いだったらしくって……」
少し照れたようにはにかんで話す美鈴は、とても可愛らしい。嬉しそうだった表情にも納得がいく。
「で、ね。そのまま彼と盛り上がっちゃって……」
「……で？」
言い難そうにこちらをチラリと見遣った美鈴へ先を促す。
「……ご一泊、しちゃったの……」
消え入りそうなほど小さな声で言うと、俯いた。
……ご一泊？絢子は頭の中で彼女のセリフを一度反芻してみてから、やっと彼女の意図するトコロが理解できた。
「……あ、そ、そう。好かったわね。」

絢子は精一杯普段通りの声色で答えたつもりだったが、少し声が震えた。昨夜の自分と余りにも同じ状況な美鈴の『ご一泊』と云う表現に、激しく動揺したのだ。
美鈴は照れながらも自身の幸せで一杯のようで、絢子の様子にまで気が回っていないのがせめてもの救いだった。
「ありがとう、絢ちゃん。」
改めて、お礼なんて言ってくる。
絢子の頭の中では、まだ『ご一泊』と云う言葉がグルグルと回り続けている。やっと治まって来ていた頭痛がぶり返して来そうだ。
「……で、グラマーの予習をしてないから写させて欲しいってコト？」
「……えへへ。」
幸せそうな美鈴を見ていると、今朝からの（正確には昨夜からだが）自分の状況が全て夢の中での出来事ように感じられた。全て、退屈を嫌った自分の夢だったのではないか――と。いや、いくら退屈が嫌でもあそこまでの刺激は求めていないし。思わず、自分で自分に突っ込みを入れる。そうだ、夢だと思う事にしよう――そして、全部忘れよう。この時、絢子は密かにそう決意したのだった。

「ただいま。」
「あら、お帰り。今日は早かったのね。」
絢子が帰宅すると、珍しく母親が家に居た。元教師で、教育に関する本を何冊出版してから教育評論家なんてものをしている母親は、多忙な人で滅多に家には居ない。
彼女の持論『教育には愛情が不可欠』を、全くと言って良いほど自分の娘には実行出来ていない。その事実に、果たして本人は気付いて居るのか居ないのか――。いや、きっと絢子を除いて、誰もその

事に気付きはしないだろう。若しくは、気付いていたとしても、最早絢子の事などどうでも良いのか――そのどちらかだと、絢子は確信していた。

「今日は、生徒会がなかったから。そっちこそ、今日は早いわね。確か――出版社の方たちとお食事会じゃなかったの？」

「そうなのよ、だから一旦戻って来て着替えることにしたの。」

「――そう。」

母親の事を『お母さん』と呼べなくなってどれくらい経つだろうか――。きっとそんな事にもこの母親は気が付いていないに違いない、そう絢子は思った。

「あ、絢子。ちょっと待って、こっちとこっち、どっちが好いかしら？」

自分の部屋へ行こうとした絢子を呼び止めた声が、尋ねる。

「……どっちも素敵だけど……、右のネックレスの方が上品じゃない？」

久しぶりに顔を合わせた娘に聞く事がそれか……。思いながらも、そんな母親の身勝手な質問にも笑顔で答える。

「そう？」

鏡を前に、確認をしている母親の横を通り過ぎて再び自室の方へ向かった時、思いだしたかのように母親が口を開いた。

「そう云えば、絢子。あなた、学校ではきちんとしているんでしょうね？」

「……勿論よ。」

「そう、ならいのよ。最近は、素行の良くない生徒が多いでしょう？あなたは、くれぐれも私に恥をかかせないように、しっかりして頂戴ね。」

既に仮面のように顔の一部になった優等生の笑顔で答える絢子に、

満足そうな笑みを返して、母親は食事会へ出掛けるために玄関へと向かった。

「勿論よ――……。」

昨夜、娘が家に帰っていなかった事に気付く様子など全く見られない、自分の母親。彼女の背中に向かって再びそう言った絢子の顔は、決して微笑んでなど居なかった。

彼女にとって、私はただ成績優秀で真面目な生徒で居れば、それで好い。私は、ただそれだけの存在。
今更、期待などして居なかったけれど――。

【6．最悪な再会（Ⅰ）　】（前書き）

第５話～第８話まで一気にＵＰしました。
楽しんでいただければ、嬉しいです。

【6．最悪な再会（Ⅰ）】

先日の出来事が絢子の中で『ただの夢』として正式に認識され始めた頃、絢子は久し振りに渋谷へ向かって居た。
そろそろ代替わりの引き継ぎをしなければならない生徒会の仕事が思いの外忙しくて、中々放課後に時間が取れなかったのだ。実に３・４週間振りの渋谷は、絢子にとってここの所の鬱憤を晴らす格好の場所へと足は速まる。
駅に着くと早速いつもの儀式を終えて、街へと歩みだす。
人の波、音の洪水。それら全てが、アヤコには心地好かった。
アヤコはまるで水を得た魚のように、渋谷の街を自由に泳ぎ回る。
が、今日は何故かいつもより多くの視線を感じる気がした。不思議に思いながらも交差点を渡ろうと顔を上げた時、『ソレ』が目に飛び込んで来た。

『素顔の休息』と手書き風の文字でキャッチコピーが書かれた、一枚の巨大な広告看板。
少し化粧の落ちた、スッピンに近いような状態の女の子（少なくとも成熟した大人の女性ではないように見えた）が、男モノの腕時計を嵌めたままの腕に顔を寄せて、眉尻を下げた優しげな顔で眠っている顔――と、うつ伏せた肩がシーツから出ている半裸のアップ写真。

それは、紛れもなくアヤコ（絢子）の顔だった――。

「あ、あれだよね？上条壱哉（かみじょういちや）の新作写真集の宣伝って――。」
「そうそう！モデルは非公開なんだってさ。まさか、彼女だったりして――。」
「やだ～、やめてよ～。アタシ結構ファンなのに～。」

アヤコのすぐ後ろで信号待ちをしている女の子たちが、看板を指さしながら言っているのが耳に入った。
え、何？どう云う事――？
アヤコは何が何だか解らず、頭の中がパニックになっていた。
あれ、私……よね？でも、あんな写真、撮った覚えないんだけど……。
ちょっと待って、上条壱哉って言った？……今の子たち。上条壱哉……どっかで聞いたことあるような……？
まさか――あの時の――……アイツ！？
いや、アイツ以外考えられないけど……。勝手に人の寝顔を写真に撮るなんて、何てヤツ――。
アヤコの頭が怒りで一杯になりそうになった時、再び後ろの2人の声が耳に入って来た。
「でも、キレイだよね～。何か幸せそうに微笑んでる感じでさ～。」
「だね～。私も彼に撮って貰えるなら、何でも好いよ～。アタシも写真集に載せて欲し～！」
「ばっか。じゃあ、ヌードとかでも？」
「当ったり前じゃん。だって、上条壱哉だよ！？本人も超イイ男だし、即ＯＫでしょ！」
「その前に、アンタ、全国に見せられる外見かっつーの！」
「ひっど～い！そんなの判んないじゃんか、上条壱哉が撮ってくれたらキレイに写るかもよ！？」
「修正しまくってやっと、とかじゃないの～？」
じゃれあって笑う少女たちの声が、雑踏の中に響いては掻き消されて行く。

アイツって……もしかして結構有名――？
いや、でも、人の写真を無断で使うのは許せない……わよね、うん。文句くらい言わなきゃ気が治まんないわ――。
そこまでアヤコの考えが及んだ時、信号が青に変わって大勢の人の

波が道路に押し寄せて来た。アヤコがその波に身を任せながら同じように歩いて居ると、嫌でも目の前にある広告看板が目に入る。
まあ、確かにキレイに撮れてる――のよね、何か悔しいけど。私じゃないみたいに美人に写ってるし。何かナチュラルで――まあ、勝手に写真撮られた事を差し引いてアゲテも好いくらいにはイイのよね……。
私、あんな顔して寝てたのね――。
少しずつ冷静になって来た頭で、改めて看板を眺めていると、ふと、背後から声を掛けられた。

「ねえねえ、彼女～。」
聞き覚えのある声。
「ねえねえ、彼女ってば。」
アヤコは意を決して振り返る。そこには、先日の若い男――もとい、上条壱哉の姿があった。何故かバツが悪そうな様子の彼に構わず、アヤコは厭味たっぷりに口を開く。
「……随分と勝手な事をしてくれたみたいね、上条センセ。」
「――ごめん！！」
壱哉は開口一番、頭が足にくっ付きそうなほど、勢い良く体を折り曲げた。
「今更だけど――勝手なことして、ホンットに、ごめん！！」
「……もう好いわ。キレイに撮れてるし……。どうせ、私だって分んないでしょ？」
壱哉の勢いに押されて、アヤコは半分呆れつつも小さな溜息と共に言葉を吐き出した。
渋谷のスクランブル交差点の上で――。

【7．最悪な再会（ＩＩ）　】（前書き）

第５話～第８話まで一気にＵＰしました。
楽しんでいただければ、嬉しいです。

【7．最悪な再会（Ⅱ）】

壱哉とアヤコは、取り敢えず交差点から離れて手近なスタバへ入ることにした。カフェラテとカプチーノを受け取ってトレイに乗せると、カウンター席に横に並んで腰掛ける。目の前には、例の看板広告が見るつもりがなくても視界に入る位置にある。アヤコはなるべくそっちの方を見ないようにして、口を開いた。

「……で、また渋谷でナンパ？」

「ち、違うよ！アヤコちゃんを探してたの！」

そもそも、この間のもナンパじゃないし……とかブツブツ言いながらも、壱哉はハッキリと言い切った。

「……私？何で？てか、渋谷で張ってたの？」

「うん！」

何も考えていないかのような勢いのあり過ぎる返事に、アヤコは眩暈がしそうになる。

この人、本当に件（くだん）の写真家なんだろうか？見た目は――確かに女の子たちが騒ぐのが解るくらいには整っているかもしれないけれど、良く言ってちょっとバカな大学生って感じにしか見えないんだけど。って言うか、私こんなのと昨晩――いや、そこは考えるな、私。アヤコは、凹んで行く自分自身を勇気付けたい気持ちになる。

「……えっと、東京の人口の多さは解ってるよね？」

「それくらい解ってるよ～。正確な数までは、識（し）らないけど……。」

「じゃあ、もしかしなくても――アンタって、すんごい馬鹿？」

「え～、酷いなぁ～。好いじゃん、また逢えたんだから～。」

またもやカナリな事を言われているのにも拘わらず、何故か嬉しそうだ。

「いや、だからって普通、また逢えると思うかっていう話よ！つー

か、語尾を伸ばすな！」
あれ？このセリフ、この前も言ったような気がするんだけど……。
アヤコは奇妙な既視感に見舞われた。
「大丈夫！俺、運だけは無茶苦茶好いから！！」
今度は言葉を切ってハッキリと発音した壱哉。
そう云う問題か……って突っ込みたくなるトコロをぐっと堪(こら)えて、
アヤコは次の話題を振る事にした。細かい事を気にしていたら、この男とはまともに話が出来そうもない。これで成人しているんだから、日本の将来が危ぶまれる……とアヤコは一人溜息を洩らす。そう云う彼女も、日本の将来を担う世代なのだけれど。
もしかして……コレが芸術家にありがちな、一般的常識の欠如ってヤツ？ここに来てやっと、アヤコはソレに思い至ったと同時に、制御不可能な事実に脱力した。

「あ、そう……。で、私に何の用？」
「えっとね、これを渡そうと思って……。」
言いながら肩から掛けていたバッグの中をゴソゴソと探る。中々探し物が見付からないらしく、
「あれ～？」
とか言いながら5分近く探り続けて、漸く彼がバッグから取り出したのは……少し華奢な男モノの腕時計だった。それは、アヤコにとって父親の唯一の形見に等しいもの。アヤコはそれを半ば条件反射的に彼の手から奪おうとした――が、瞬時に壱哉がかわしたため、奪い取る事が出来なかった。こう云う時は意外とすばしっこいらしい。

「――なっ。返してよ！」
「返すよ。返すけど……あのね。」
壱哉は勿体ぶった仕草で、ゆっくりと次の言葉を口にした。
「あのね、これ返すから……代わりに、俺のモデル。やって？」

「……はぁ？」
「だから……、これ返すから。俺のモデル、やって。」
口調が疑問形から命令調に変わってるんですけど……なんて悠長に突っ込みを入れている場合じゃない。
「……モデル！？何の？てか、何で？」
「そんなの決まってるよ。俺がアヤコちゃんを気に入ったから！」
こいつにマトモな理由を求めた私がバカだった……とばかりに、アヤコは大きくため息を吐く。
「だ～か～ら、何で私がアンタのモデルなんかしなくちゃいけない訳！？そもそも、私はあの看板のヤツだってＯＫした覚えはないのよ！」
「解ってるよ。アレは俺が悪かったって。だから、その件は誤ったでしょ？で、今度のはキチンと前承諾貰ってからと思って。」
「……嫌よ。」
自分が悪かったなんて露ほども思ってないくせに、よく言うわよ。
アヤコは心の中だけで悪態吐いて、仕返しとばかりに思いきり否定の言葉を述べた。
「何で？」
「何でって……嫌なものは、嫌なの。」
「え～。何で～。あの看板、キレイに撮れてるって誉めてくれたじゃん。あれよりも、も～っとキレイに撮る自信あるよ、俺？」
正直、あれよりもっとキレイに撮ってくれるって云うのは魅力的だと思うけど……でも、目立つ事は極力したくない。――それが、今までアヤコ（絢子）が上手くやって来た方法だったから。

「……見立ちたくないから、ヤダ。」
「何で目立ちたくないの？」
本当に不思議そうな顔をし訊ねて来るから、なんだか答え難くて声が小さくなってしまう。
「……学校とか、さ。目立ってたら色々面倒臭い事になる……でし

ょ。親とかも。」
「……それだけ？」
「え？」
「嫌な理由、それだけ？」
「え、あ、うん……。」
「あのさぁ……そんな風にしてて、詰まんなくない？」
壱哉の薄めの唇から何気なしに出て来た言葉が、アヤコ（絢子）の心情ど真ん中を、ストレートに一気に駆け抜けた。
「……詰まんないよ。けど……どうしようもないじゃん。」
「そりゃ、そうやって何もしなけりゃ、今のまんま。な～んにも変わる訳ないよ。」
「でも……。」
「あのさ、変化は確かに怖いよ？自分が変わるって事は、周りも変わって行くって事だから。だけど、それを恐れてたら、何にも変わらないまま。一生、退屈なままなんだよ？少なくとも、俺はそんな人生嫌だね。自分の人生だもん。楽しまなきゃ損でしょ。事実、俺は自分の人生楽しんで生きてるけどね。」
そう言った壱哉の顔は、本当に楽しそうに微笑んでいる。
「でも、だからってモデルって言うのは……。」
「だから、それも選択肢の一つってコト。因みに、モデルは俺の専属だから。ついでに言うと、他の奴に撮らせるつもりなんかないから。だから、アヤコちゃんの正体を知ってるのは、俺だけ。……どう？」
「どうって……。」
「変化の手始めには、持って来いじゃない？」
「そんな事言われても……。」
「て言うかさ、どっち道アヤコちゃんに選択権はないから。俺、最初に言ったよね？この時計を返すのと引き換えだって。」
返す言葉のないアヤコに、壱哉はまたどこか嬉しそうに微笑みながら、今回はカフェラテの入ったマグカップを口に運ぶ。何だか話が

アヤコの意図しない方へ進んでいるばかりか、いつの間にかバカだと思っていた男に説得され掛っている。能ある鷹は……と言うより、成人した人間らしい事も言えるのねってトコロか――。

兎にも角にも、アヤコのカプチーノが冷え切ってしまう頃には、いつの間にかモデルの件を承諾させられて居たのだった。

【7．最悪な再会（ＩＩ）　】（後書き）

ご意見ご感想などいただけると嬉しいです。続きを書く励みになりますので、宜しければお願いします。

【8．最悪な撮影見学】（前書き）

もの凄く久し振りの更新です。楽しんでただければ好いのですが…

…

【8．最悪な撮影見学】

「もう少し、右下を向いて。――そう、視線も落として。ＯＫ、好い感じ」
スタジオ内に、壱哉の少年のような不思議なトーンのよく通る声と、カシャ・カシャ、とカメラのシャッター音だけが響いている。
先日、何が何だか解らないまま専属モデルになることを承諾させられたアヤコは、「取敢えず、撮影現場を見学しにおいでよ」と言う壱哉の提案を、これもまた半ば無理やり受け入れさせられる形で、壱哉が撮影しているフォトスタジオへ見学に来て居た。

あれから、何となく気になって上条壱哉と云う写真家について調べてみたアヤコは、彼が国内外で開催されたここ数年の間の新人賞を総なめにしていて、現在、若手と言われているカメラマンの中で間違いなく一番と言って好いほど注目を浴びている人物である、と云う事を知ったのだった。
改めて、モデルの件を受けてしまった事を少し後悔したアヤコだったが、彼の言った言葉が頭の中にこびり付いたかのように取れなくて、結局、未だに断りそびれているのだ。

――何もしなけりゃ、今のまんま。一生、退屈なままなんだよ？自分の人生だもん。楽しまなきゃ損でしょ――。

高校生みたいな顔と声で、いつもは外見通りのどこか一本ネジの抜けた言動ばかりのくせに、あの時だけは、何故かちゃんとした大人の顔をしているように見えた気がした。
アヤコは、キレイにポージングを決めた女性モデルたちを、軽やかにダンスでも踊るかのようなステップで撮影して行く壱哉の後ろ姿を見詰めながら、先日の彼の言葉を思い出していた。

彼の言葉を心の中で反芻した瞬間、心の奥底の方で『ナニカ』がその言葉に反応して、少しだけ、ほんの少しだけだけれど、再び蠢いた音が聞こえた気がした。アヤコの中でずっと燻っていた『ナニカ』が――。

「はい、オッケー。凄く好かったよ～。お疲れさま～」
一際ハッキリとした声で壱哉が言うと、女性モデルたちも同じ様に「お疲れ様でした～」
と口にして、スタジオ内が一気にリラックスしたムードになる。
スタッフたちもまた口々に同じセリフを言い合っては、いそいそとスタジオ内の片付けを始めたのだった。

「――どうだった、実際に見てみて？」
壱哉が先ほどまで使用していたカメラを片手に持ったまま近付いて来て、声を掛ける。
「どうって言われても……。あんなのを私に期待されても、無理だから」
アヤコはモデルさんたちのキレイなポージングを揶揄して言った。
「あはは、当り前だよ。彼女たちは、プロだからね。少なからず作品のために表情を作ってる。アヤコちゃんには、もっと自然な感じの――この間の看板みたいなリラックスした表情を期待してるから」
褒めてるんだか、そうでないんだか。イマイチ好く解らない発言をして、アヤコに向かって軽くウインクして見せた。
壱哉の言動にどう突っ込んでも好いものか思案していると、先ほどカメラのファインダーの中に居たモデルの一人が、ハイヒールの音を軽快に響かせながら近付いて来た。
まだ高校生くらいのあどけない顔にばっちりとメイクが施されていて、どこから見ても人気美人モデルって感じだ。自分が美人である事を十分に知っているのだろう。彼女を包むオーラが自信に充ち溢れている。

「壱哉センセ、この子が今度のバンビちゃん？」
何だか少し棘のある言い方だった。彼女と初対面のアヤコには、それが何に対する棘かは判らない。が、壱哉はその棘に気付いていないのか、さして気に留めた風でもない。「バンビちゃんって何よ？」と、アヤコが視線で壱哉に訊くと、彼は少し微笑んで口を開いた。
「そ。彼女は俺が無理言って頼んだんだ。彼女の情報は非公開にするから、アイちゃんも秘密にしといてね」
壱哉が子供みたいに唇の前で人差し指を立てる仕草をする。彼の発言から察するに、どうやら、バンビちゃんと云うのは彼の写真集のモデルの事らしい、とアヤコは理解した。
「ええ～。センセ、次はアタシを撮ってくれるって約束したじゃん～」
「あれ、そうだったっけ？ごめんね～。でも、アイちゃんくらいのモデルさんなら、俺の写真集なんて小さい仕事でしょ！？」
「そんなことないよ！アタシ、壱哉センセの仕事なら、他の仕事蹴ってでも大歓迎だよ～！」
「あはは、ありがと～。でも、今回はもう決めちゃったんだ。ごめんね。だから、また機会があったらヨロシクね」
「絶対だよ！？約束ね！」
そう言って、壱哉の腕に縋り付くような仕草で彼にすり寄ると、丁度壱哉の正面に当たる位置に居たアヤコの方を視線だけで振り返って、フフンと鼻で笑った。アヤコはアイの態度に、何だか馬鹿にされたような、妙に釈然としない感覚を覚えた。さっきの棘のある発言といい、事情を呑み込み切れていないアヤコは少し困惑気味になる。

「アイ～。次の仕事遅れるわよ～。早く支度しなさい！」
スタジオの入口辺りで、彼女のマネージャーらしき中年の女性が催促の声を上げた。

「ちぇ、タイムオーバーか。しょうがない……。壱哉センセ、さっきの約束、ゼッタイだよ？」
心底詰まらなそうに呟くと、絡めた腕を彼女の胸に押し付けるようにしてギュッと抱き込むと、念を押すように壱哉を上目づかいで見上げながら言った。
「解った、解ったから。早く行かないと、園居さん困ってるよ？」
壱哉が苦笑しつつも、アイを促す。
「は～い。じゃあ、壱哉センセ、お疲れさまでした～」
アイは仕方なさそうに彼の腕を離して、再度挑戦的な視線でアヤコの全身を観察するかのように見遣ってから、別人のように元気好く言うとスタジオの入口の方へと足早に向かって行った。
アヤコは、名残惜しそうにスタジオを後にするアイの後ろ姿を眼の端に留めながら、なるほど……と、先ほどの棘のある発言と彼女の態度に、まるで他人事のように納得していた。

「……流石、おモテになる事で」
「え？アヤコちゃん、何か言った？」
無意識に呟いた皮肉の込もった言葉に、自分で驚く。幸い、壱哉には聞こえて居なかったようだ。

「――何でもない」
同時に、一瞬何かの感情がアヤコの心の中に顔を出した気がしたけれど、この時のアヤコは、自分が他人の色恋沙汰に興味を持つなんて珍しいな、くらいにしか思わなかった。

【9．最悪な撮影（Ⅰ）】（前書き）

物凄く久しぶりの更新となります。楽しんでいただければ好いのですが・・・

【9．最悪な撮影（Ⅰ）】

朝から太陽の光が燦々と光輝いている、初夏の日曜日。
アヤコと壱哉は、渋谷の街に来ていた。
大勢の人間がひしめく雑踏の中、アヤコがいつものように人の洪水の中を自由に泳いで行く様を、壱哉が少し離れた位置からカメラに収めて行く。
まるで、隠し取りのように――。

渋谷に着いて直ぐに、壱哉は
「いつもと同じように、適当にブラブラしてくれればそれで好いから」
そう言い残して、アヤコの視界から消えたのだった。
撮影用の衣装も化粧もナシ。正確には、いつも渋谷へ足を運ぶ時のように自分でメイクをしていたからノーメイクではないけれど、それでもプロのソレとは全く違っているし、衣装に至っては完全にアヤコの私服だ。
先日壱哉のスタジオ撮影の様子を見学していたので、正直あまりの違いに大丈夫なのだろうかと一抹の不安を感じたアヤコだったが、いつもの街並みへ足を踏み入れている心地よさと安堵感で、いつしか彼の存在そのものも気にならなくなっていた。
だから、壱夜に「アヤコちゃん、そろそろ終わりにしようか」と声を掛けられた時も、一瞬何の事だか解らなかったくらいだった。

「アヤコちゃん、どうかした？」
「え？あ、何でもない。撮影、もう終りなの？」
アヤコは何でもない風を装って、言った。
「うん。今日の分は大体ね。今度は、また違う場所でお願いしても好いかな？」

「……解った。どこ？」
「実は、まだハッキリとは決めてないんだけど……アヤコちゃんは、海と公園どっちに行ってみたい？」
「次の撮影場所？」
「うん」
「――海、かな」
「海ね、了解。んじゃ、そのつもりで準備しといてね」
「あ、ねえ」
「なに？」
「今日は……その、メイクとか服とか自前だったけど、良かったの？」
「ああ、うん。勿論。今回のコンセプトは“自然体”だからね。あ、若しかして、プロのメイクとか体験してみたかった？」
「え？いや、そう云う訳じゃないんだけど……。私なんかの素人メイクで大丈夫なのかな、と思って」
「全然ＯＫだよ！でも、海の時はちゃんと衣装用意するからね。濡れちゃったら洋服駄目にしちゃうかもだし」
壱哉はそう言うと、顎の辺りに手をやって少し考える仕草をしてから、何かを思い付いたかのように悪戯っぽく微笑んだ。
彼の笑顔に言い知れぬ不安が過ったアヤコだったが、触らぬ神に祟りなし……とばかりに、気付かない振りで「了解」と返事をしたのだった。

「これを着て、準備できたらこっちの砂浜に来てね。撮影始めるから」
アヤコが壱哉にそう言って渡されたのは、少し厚めの生地ではあるが柔らい肌触りの真白なコットンワンピースだった。

渋谷での撮影から丁度1週間後の日曜日。アヤコは壱哉に連れられて、横浜へと来ていた。今日は、メイクも必要ないと撮影日の連絡を受けた時に壱哉から言われていたので、アヤコの顔はスッピンのままだ。

……一体、今度はどう云うコンセプトなんだろう？

アヤコは疑問に思いながらも、壱哉の車――大型の四駆なので、中での着替えも楽々と行える――の中で先ほど手渡されたワンピースに袖を通していた。

真白で、飾り気のない、キャミソール風ワンピース。どこかの有名ブランド物らしく、確かに可愛いんだけれど、とってもシンプルなデザイン。

着替え終って何となく全身をチェックしていた時、不意にドアが開いて壱哉が顔をのぞかせた。

「あ、そうそう。言い忘れてたんだけど、透けちゃうとまずいから下着は取ってね」

にっこり笑って言い終えると、何事も無かったかのようにドアを閉めてセッティング中の機材の元へと走って行く。

あまりにも予想外の一言に、アヤコの思考はフリーズしてしまった。

「アヤコちゃ～ん、準備できた～？」

車から少し離れた位置でカメラのセッティングをしていたらしい壱哉が、大きな声で呼んでいる。中々出て来ないアヤコに痺れを切らしたのか、手にして居た機材を三脚の横に置いてあるボックスの上に置くと、車に向って小走りに駆けて来た。

アヤコは正直戸惑っていた。ただでさえモデルとしての写真撮影なんて経験がないのだから、壱哉の要求に応えるべきなのか判断がつかないし、内容がアヤコの想定外過ぎて、そもそもそんな要求に応えても好いのかと云う事自体の判断が付かない。

要するに、プチパニックに陥って居たのである。

「アヤコちゃん、準備――」

そんなアヤコの心情など知る由もない壱哉は、呑気に車のドアを開けながら声を掛ける。が、先程と同じ姿勢でフリーズしたままのアヤコに、壱哉は怪訝な顔になる。
「――アヤコちゃん、どうしたの？」
「……え？あ、あの……」
「なに？」
「あの、ね。さっきの……」
「うん？」
「し、下着……なんだけど」
「ああ、下着取ってねって言った事？」
「……うん」
アヤコの心許なさを反映してか、彼女の声が少しずつ小さくなって行く。その様子にアヤコの心情を察したのか、壱哉は殊更明るい声で言った。
「大丈夫。透けないように撮るから、心配ないよ」
「でも……」
「大丈夫だって。おれ、こう見えてもプロだよ？信用してよ。それに、アヤコちゃんだって下着が濡れちゃったら帰り困るでしょ？」
「それは……困るけど」
「んじゃ、おれ外で待ってるから、準備できたら出て来てね」
有無を言わせぬと云った感じで会話を終わらせると、笑顔でドアを閉めた壱哉は、またしても強引に事を進めた。最早、確信犯と言っても差支えないだろう彼の顔は、何か企むような不敵な笑みに満ちていた。
結局、壱哉に押し切られる形で車内に一人取り残されたアヤコは、少しの逡巡の後、ゆっくりと下着の肩ひもに手を掛けたのだった。
脳裏に、壱哉の言葉を反芻させながら――。
――変化を恐れてたら、何にも変わらないまま。一生、退屈なまま

なんだよ？――

身支度を整えたアヤコは、意を決して勢いよく後部座席のドアを開けると、小さく深呼吸をして、ゆっくりと壱哉の居る方へ向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5305e/

素顔の休息

2011年6月24日04時22分発行